

原 著

# 日常生活の活性化を目指して —日常着への着替えを取り入れて入院生活における変化をみる—

糸魚川総合病院、第5病棟；看護師<sup>1)</sup>、介護員<sup>2)</sup>

渡辺 征枝<sup>1)</sup>、渡辺 一枝<sup>1)</sup>、田代 大輔<sup>2)</sup>、橋立 咲子<sup>2)</sup>

目的：日常着への着替えを取り入れることで、生活リズムの確立、離床への意欲向上等の変化がみられるか検証する。また、スタッフは意識を持ち、患者に合わせて関わるができる。

方法：日中、日常着への着替えを実施した。実施前後に、N式老年者用精神状態尺度(NMスケール)とN式老年者用日常生活動作能力評価尺度(N-ADLスケール)を用いて、行動と日常生活動作能力を評価し、その変化をみた。

成績：精神状態、日常生活動作能力とも、評価スケールの点数が向上した患者が多かった。また、スタッフも患者の細かな変化に気づき、アプローチすることができた。

結論：日常着への着替えは、生活リズムを確立し、日常生活の活性化につながった。

キーワード：日常着、日常生活の活性化、スタッフの意識向上

認知症の日常生活自立度判定基準：療養病棟において日常生活の自立度を9段階のランクで評価する方法

NMスケール(N式老年者用精神状態尺度)：老年者及び認知症患者の日常生活における実際的な精神機能を種々の角度から捉えた行動観察による評価表

N-ADLスケール(N式老年者用日常生活動作能力評価尺度)：老年者及び認知症患者の日常生活能力を多角的に捉え、点数化して評価する行動尺度

日常着：今回の研究のために、ご家族に準備していただいたもの。在宅で使用していた普段着、トレーナー、パジャマ等を示す。

## 2. 研究目的

日常着への着替えを取り入れることで、生活リズムの確立、離床への意欲向上等の変化がみられるか検証する。また、スタッフは意識を持ち、患者に合わせて関わるができる。

## 3. 研究方法

### 1) 期間

平成17年12月27日～平成18年2月3日

### 2) 対象

当病棟入院中の患者10名

対象の選定条件は、

- (1) 活動への参加が可能な患者。
- (2) 研究の主旨、方法を本人、家族に説明し、同意を得られた患者。

### 3) 方法

- (1) 患者、家族に、研究の主旨、方法を説明し同意を得る。
- (2) NMスケール、N-ADLスケールを用い、精神機能及び日常生活動作能力を判定し、データを収集する。
- (3) 日中、日常着への着替えを実施する。時間は10時から16時とし、三週間実施する。自立している患者は自分で更衣してもらい、介助が必要な患者にはスタッフが介助する。
- (4) 一週間毎にNMスケール、N-ADLスケールを再評価し日常生活の活性化、QOLの向上がみられたか評価する。
- (5) スタッフにアンケートを実施し、方法は適切だったか、また、患者の日常生活活性化の必要性について意識調査する。

## 緒 言

高齢者の日常生活動作は、加齢と共に衰えていくが、身体的障害を持つことにより加速度的となる。人間としてよりよい生活を送れるような条件の一つに、日常生活動作の向上がある。日本医療機能評価機構の「療養病床に特有な病院機能」においても、患者のQOLを支え、人権を尊重する基本姿勢を重要視している。

当病棟(平成18年6月に療養病棟から特殊疾患療養病棟に移行)においては、レクリエーションや誕生会などを通して、日常生活の活性化に努めているが、生活リズムの確立に対する取り組みが少なかった。

そこで、生活リズムの確立、離床への意欲向上を目的に、日常着への着替えに取り組んだ。結果、患者の表情が豊かになり、活気が出た等の変化がみられ、スタッフも日常生活の活性化についての意識が高まったので報告する。

## 対象と方法

### 1. 用語の定義

障害老人の日常生活自立度判定基準：障害を有しながらも日常生活の自立度を4段階のランクで評価する方法

## 結 果

研究前の患者の概要を表1に示す。また、実施の結果について表2、表3に示す。

表2、表3より、NMスケール、N-ADLスケール共に点数が向上した患者が多かった。NMスケールでは、会話が増え表情も豊かになった患者が10名中7名で、レクリエーションにも積極的に参加できるようになった。N-ADLスケールにおいても、オムツを使用していた患者が尿意、便意を訴え、トイレで排泄できるようになった患者が3名いた。また、日常着への着替えを実施するにあたり、自ら行なおうとする姿勢が見られたことも生活リズムの活性化につながった。

スタッフへのアンケート結果より、今回の方法や患者の選定条件は適切であった。更衣をすることで、昼夜の区別ができ、生活感が持てたことは良かった。また、療養病棟ということもあり、継続していく必要があるという意見が多かった。

## 考 察

表2、表3から分かるように、両スケール共に点数が実施前より高かった患者は変化が見られなかった。点数が上がった項目としては、NMスケールでは関心・意欲・交流や会話の項目が多かった。竹内らは「身だしなみは、自分らしく装い、かつ生活にメリハリをつけるものとして生活施設においては食事と排泄と並んで重視すべきものと言える。」と述べている<sup>(1)</sup>。患者は積極的に更衣しようとする姿勢が見られ、更衣という動作を通して、スタッフからの働きかけが多くなり、会話も増えた、そして鏡の前に立ち、自らの姿を整えるという一連の動作が心理面に変化をもたらし、日中の活動に入るという心構えができたと考えられる。また、食堂に出て食事をしたり、レクリエーションに参加したりすることで患者との交流が盛んになり表情も豊かになったことにつながったと考える。一方、N-ADLスケールでは、排泄の項目の点数が上がった患者が多かった。竹内らは「オムツを着けていても少数ではあるが尿意、便意が残っている高齢者がいる。このような例には尿意、便意を訴えた時に、介助をしてポータブルトイレあるいは一般トイレを使って排泄させる。」と述べている<sup>(2)</sup>。私たちは、患者との関わりを通して、入院時よりオムツを使用していた患者に尿意、便意があることに気づくことができた。そこで失禁しないよう時間をみて誘導しながらトイレまたはポータブルトイレでの排泄を試みたことが、排泄行動の確立につながったと考える。

三週間という短期間で、さらに対象の年齢や既往症を考慮すると各スケールの点数が向上したこともさることながら、患者の心理面、表情の変化は予想をはるかに超える結果となった。日常着への着替えという動作を通して日々の変化を観察し、スケールを用い評価することで、患者の状態に合わせた働きかけができるよう、私たち自身の意識が変化したことも、このような結果に影響したと考える。

今回の取り組みを継続するために「日常着運用マニュアル」及び、「日常着の導入に関する説明及び同意書」を作成した。今後も患者との関わりを通して、日常生活動作の向上に努めていきたい。

## 結 論

1. 日常着への着替えは生活リズムが確立でき、日常生活の活性化につながった。
2. 患者の状態に合わせた働きかけができるよう、スタッフの意識が高まった。  
当病棟は、特殊疾患療養病棟へ移行となり、寝たきりや、医療処置を必要とする患者が増加した。今回の取り組みを継続するのは困難な状態にあるが、高齢者ケアの現場において重要なことであると考えられる。継続、実施できるよう努力していきたい。

## 文 献

1. 大島操 三重野英子 マーナ豊澤英子. 介護老人保健施設における入所者の被服行動に関する看護アセスメントの視点. 第33回日本看護学会論文集, 2002; 153~155.
2. 大塚俊男 本間昭. 高齢者のための知的機能検査の手引き. 第14版. 東京: 株式会社ワールドプランニング, 1991.
3. 竹内孝仁 川上耕造編著. 明日の高齢者ケア. No. 7: 中央法規出版株式会社, 1993; 124~125.
4. 病院機能評価固有評価項目解説集. 財団法人日本医療機能評価機構, 2003.

## 英 文 抄 録

### Original Article

Study of the effect by changing into casual wear in hospital on an activation of daily life

Itoigawa General Hospital, the 5 th ward; nurse <sup>1)</sup>, nursing-care worker <sup>2)</sup>

Masae Watanabe <sup>1)</sup>, Kazue Watanabe <sup>1)</sup>, Daisuke Tashiro <sup>2)</sup>, Sakiko Hashidate <sup>2)</sup>

Objective: We studied the effect by changing into casual wear in hospital on activation of daily life; an establishment of daily life cycle, a desire-raising for early rising.

Study design: We changed the patient's sleeping suits into their casual wears. At both pre- and post-dressing its effectiveness was judged with Nishimura style senile mental state scale (NM scale) and Nishimura style senile activities of daily living scale (N-ADL), as an improvement of mental behavior and a daily activity, respectively.

Results: After changing clothes many patients showed an improvement in both mental states and daily activities. Our nursing staffs could easily respond to any patient's problems.

Conclusion: Changing into casual wear in hospital is very useful to establish their life cycles and results in activating their daily lives.

Key Words: casual wear, activation of daily life, awareness-raising activity of staffs

表1 実施前の患者の概要

	年齢	疾患名	障害老人の日常生活自立度	認知症の日常生活自立度
A	85歳	脳梗塞	B2	I
B	92歳	脳梗塞	C1	IV
C	97歳	認知症	B1	IV
D	99歳	筋力低下	B2	II b
E	95歳	脳梗塞	B1	III
F	86歳	食欲低下	B2	III
G	79歳	脳梗塞	B2	III
H	78歳	脳梗塞	B2	III
I	85歳	食欲低下	B1	II
J	80歳	脳出血	B2	II b

表2 実施前後の変化

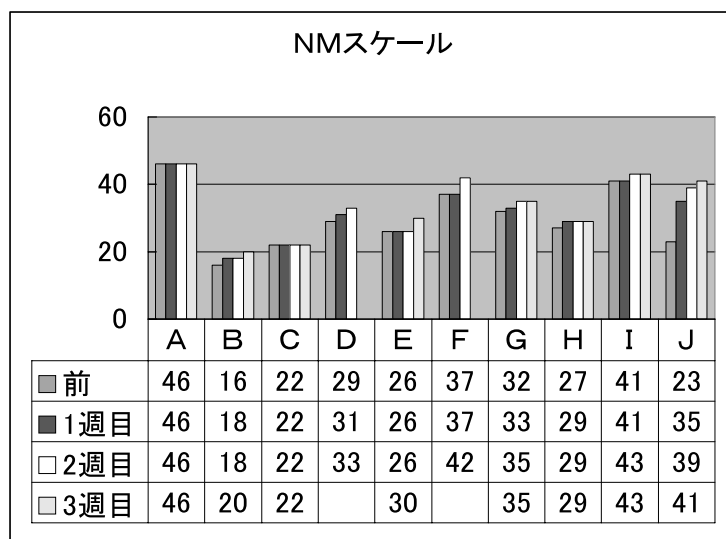


表3 実施前後の変化

